

# 阪神・淡路大震災で学んだこと

森 孝之



一月十七日の早朝、私は京都の自宅を異常な地鳴りに飛び起き、義足五本を挟んだ。テレビは、破壊された都市を映し出した。その瞬間、私は「自然と不自然の衝突」との第一印象を持った。

## 異帯と正帯

人間はこれまで、自然と自然と、自然を征服してきた。そして、自然界にはなかったものを作り出した。原子、高速道路、堤防、三

けた。天災と云う「自然」と、人間と人間が作り出した「不自然」と、不自然の衝突である。もし、地帯が自然現象を襲うていれば、不自然の衝突は大きな被害を受けていたはずだ。

よいのか、彼らは本当に異常行動をしてきたのか、むしろかたや人間のほうが自然の変化に気づかずに、脅威に不自然な行動をしてしまっている。しかも、ネズミやカラスのなかにも、どじがいたに違いない。逆に、異帯をいち早く感知したのもいたはずだ。そのいち早く正帯と見るか、それが問題。少なくとも、異帯と異帯の衝突は、一刻も早く気づき、一族郎党を安全と云うへ脅きの役割だろう。もし、異常に直面となら、まともな指揮のてきなり

ダーがいたら自然界は一発クビだ。一帯郎党は勝手な行動しては、ダーの下に再帰するかのいずれかだろう。

## 棄民への同情

テレビは爆撃された跡のよどろ都市を映し出した。住人はとどまっている。わが国のリーダーが事実把握に専心していた頃、スイスの救援隊は行動に移っていた。諸外国の動きは早かった。わが



国のリーダーはその

諸外国の支援申し入れの前に立ちまはか。救助犬の前にも、医師団の前にも、米軍空母「サンペンダ」の船にも……。その空母には救急機のヘリコプター数十機の医療、大勢の救助隊、二〇〇〇人もの収容能力が備わっている。わが国のリーダーが外国の救援隊に申し問答している間も、現場では災が広がり、こうして死者の人数があつた。たとえ知らずして救った人びとが居る、焼け死んだ

毎年わが国では、人口の割に以上の人が海外旅行をしている。当然旅先は外国の医師や救援隊の世話になれるものと期待している。被害者は決して外国の医師や救援隊を拒否してはいない。だが、リーダーは互いの下で苦しんでいるひとの意向をくんでいない。

人たちの間が、多くの人びとにボランティ活動や義援金募集活動に立ちまはらしたことはないか。もとより、十几年来、同胞を助けて自然な行動だろう。機械と初動

人が突然都市に迫り込まると、本能がモラルのいずれかを行動するという。震災後、多くの消防の活動は気味なほど静寂を保ったろう。一〇分ほどしてから電話がかかり始め、二〇分後に

人間が作り出した高速道路は一瞬のうちに、自然の力によって倒壊した



変わりりに敏感になれて情報にも良い。さらに、養蚕や養魚あるいは通信利用などが市街地のヒートアイランド化を防いでくれるのを温かくしてくれる。また、異常に敏感な野生動物とも身近に付き合えるようになり興味も感じしやすい。しかも防虫効果まであるわけだ。

なお、屋根の生かし方は、緑化の他にも雨水の涵養やソーラー発電などを自然の恵みの取り込み方は多々ある。

## 都市再生

当然、何自身に一度の「地震」とはいえ備えは大切だ。しかし震災だけに目を向けるのは不自然だ。むしろ、都市のあり方自体を見直すべきだろう。地球は深刻なほど病んでいる。もはや地球に寄生するところな都市や、その都市に寄生するところな生き方は許さない。つまり、都市は「地震」対策だけでなく、都市の「地球」対策や「人間」対策が迫られているわけだ。仮に、この震災がほんの兩年か明つまりバブルの前に起こっておれば、今頃は反省しきりの復興計画を立てていたのではないか。

二十一世紀は、環境問題と矛盾しない都市作りを求めている。まず未だ見通した理念の確立が急がれる。政府の危機管理能力や地震保険がうんぬんされているが、これらどうか。むしろ政府は限りなく小さくし、地震保険よ

り、また、たとえば、養蚕金の所得控除や借金処理を制度化するなど、相互扶助システムの確立を優先すべきだ。めつたに生じない地震の後に長年にわたって水勢の始末所得者などを作り出すような社会システムの不合理だ。欧米には、非営利団体への所得控除された寄付は税額が国民所得の数パーセントにも達している例さえある。

大切なことは、私たちが自然に対する感受性を磨き、自然現象と真正面から取り組む心を養うことではないか。そしてバランス感覚や自立心を強くし、家族の絆や同愛や郷土愛を高め、自己完結性を取り戻すことが先決ではないか。

リーダーは、研究者には研究成果や不成果を細大もろらす時公表させ、その生かし方は納税者にまかせたらい。それが、さらに強い地勢つまりありうる自然への畏敬の念を深め、何が正常なのかをわきまえ、自然現象に敏感となり、異常と正常が見分けられる人びとに育てるはずだ。この度の震災を、もうし都市再生のチャンスと位置づけはどうか。これを機に、次代の模範都市を創出し、世界が「神戸方式」と呼ぶまでにはどうか。それが大勢の犠牲者への最高のはなむけではないだろうか。

その秘訣は、太陽の恵みの範囲をわきまえた自然との共生にあると思う。

（元旭女子短大教授・もりたかゆき）

